



26

「祭」

おばあちゃんの家は、村だった。

新幹線で終点まで行って、そこから特急に乗り換えて、最後は一両編成の列車にゆられ、山を奥へ奥へと進んでいった場所にある。

1990年代の終わり頃。小学校低学年の僕にとって、その村での夏は今よりずっと「時間が長い」ものだった。

なにせ何もなかった。自動販売機さえ。娯楽がない。

よく近くの貯水池ちよすいで泳いでいた。コンクリートで囲まれた冷たいプールだ。そこで、唇が紫になるまで遊ぶ。空がどこまでも高く、蝉がうるさい。泳ぎ疲れたら、縁を歩くサワガニを観察したりした。昼ごろに家に戻ってそうめんを食べて、しばらく休んでから、また泳ぎに行く。そんな夏。

大人になった今なら、「なにもないという贅沢ぜいたく」なんてキャッチコピーみたいな言葉を並べられるかもしれない。けれども当時は、時間を持て余すのがとにかく嫌だった。昼下がりの風鈴ふうりんの音や、カルピスの味、テレビでやってる高校生的お兄さんたちの野球の試合が、退屈たいくつとセットで記憶に残っている。

でも——お祭りの夜だけは、ちがった。

例のプールの目の前にある、村の広場。

ふだんは誰もいないその場所が、あの夜だけは魔法みたいに光り輝いていた。屋台はなかったけれど、中央にやぐらが組まれていた。テーブルの上に並べられたスイカ。誰かが持ち込んだカセットデッキ。音楽。ざわめきと、笑い声と、夜風のおい。

人がわらわらとやってきて「こんなに人いたの？」って思うほどだった。

みんな陽気な顔で集まっていた。子どもたちはお約束どおり走り回り、毎朝ラジオ体操で見かける物静かなおじいさんも、その時ばかりはやけにテンションが高かった気がする。

名物は、早飲み&早食い競争だった。

やぐらの上で行われる、瓶^{びん}ビールの早飲み競争。今なら完全に絶対にアウトなやつ。強烈な娯楽だ。身内が出場するととなると、みんなで応援して楽しかった。

ラムネの早飲みとスイカの早食いには、僕もエントリーした。瓶に入ったラムネをただ飲み干すだけ。それだけなのに、ちょっとだけ高いあの場所に登り、何人かの子供たちと並んで周囲から声援のようなものを浴びると、運動会みたいで心臓がバクバクする。

あんなに真剣にラムネを飲んだのは、おそらく後にも先にもあの時だけだ。

スイカも思いつきり食べた。口の周りと手がベタベタして早く洗いたかったけど、それでも笑っていた。

みんな、笑っていた気がする。子どもも、大人も。

祭りが終わるころには、よくわからない抽選会が催された。一等の景品が自転車で、それを知った時、こんなに家から遠いのに、当たっちゃったらどうやって持って帰るんだろうと子供ながらに心配した記憶がある。実際にもらったのは箱ティッシュだった。

どこからともなく子供の泣き声が聞こえる。あの時はその気持ちができるようだった。疲れてるのに、まだ帰りたくないっていう気持ち。もし今だったら、早く帰りたかななんて思うのだろうか。

山の中にあるおばあちゃんの家は、夜になると涼しくなる。空を見上げると、腕がもうちょっと長ければ手が届きそうなところに、たくさん星があつた。風鈴じゃなくて、虫の声が心地よく響く。

きっと誰にとっても、とてもいい場所だ。

今ではその村も、すっかり人がいなくなってしまった。

おばあちゃんも、もうそこにはいない。

噂では、いまは人間よりサルの方が多いらしい。

ひよつとすると、あの広場では、今も別のかたちの「お祭り」が開かれているのかもしれない。

月明かりの下で、動物たちがスイカを囲んで、年に一度の無礼講といわんばかりに、ラムネの、いやビールの早飲みを競ってる。そんな場面を想像したくなる。

僕の思い出の中の村の祭りは、ずっとあの夜のままだ。
ざわめきと笑い声と、あの冷たい瓶ラムネの手ざわり。
みんなが笑ってた光景が、今でもぼんやり残っている。